

天野
井出
之助
譯

師範學校
掛圖
童子訓

三

176
7
346



共
五
本

東書

師範學校

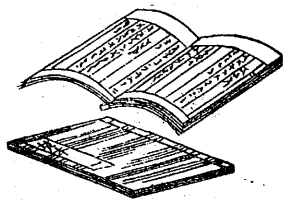
圖書

童子

本

有益なることを記載するものふし
 人よく是を讀め
 ハ知識を廣く見
 聞を増し人を志
 て賢くせしめ
 且人比情を快よ
 くする事多し

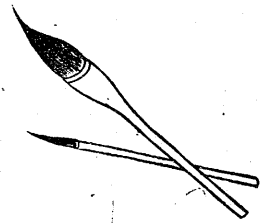
童子訓
 卷之三
 單語
 天井出猪之助輯



童子訓卷之三

筆

筆小毛筆鉛筆等有り皆字を寫すもの
 あり毛筆を鬣鬚又ハ鮫狐狸鹿等此
 毛を以て造れるふ
 り其中小ハ兔毛を
 柔小而久々耐る故
 尤もよーとを鉛筆
 ハ墨を用ゆるふ
 らバ木の細杞棒の
 中小黒きもの有り
 て刪りて直小書せるふり



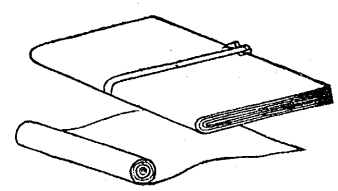
墨

墨を油烟小膠を和し龍腦或ハ麝香よ
 き物を和して造るものあり松の油
 煙を最もよーとを其用
 多く文字畫等を寫す小
 用う又火傷をせし時濃
 之たりと其所小塗る時
 を痛立小塗るあり又朱
 墨有り朱と膠を和して
 製せるあり朱ハ朝鮮琉
 球より出るをよーとを



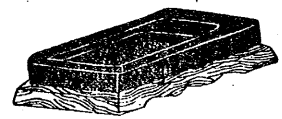
紙わみ

紙ハ木の皮又木綿麻等を以て製せられたるものなり。日本小於ては楮皮を以て製せられたるものなり。其品類甚多。大高奉書糊入半紙等皆製しやう此異なるなり。また唐紙西洋紙のり紙をたも小字を寫し繪を畫くに用ひたり。



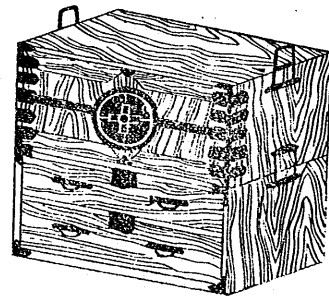
硯いり

硯を墨を磨るに用ふる具なり。通例石を以て造れり。紫石を取實緻密なり。故に上品と云青石黄石黒石等あり。青石も近江高島より多し。之出るを以て世人高島硯といふ。硯支那端溪を佳品とす。日本亦て八甲別雨畑を尤も良とす。



箆 筥

箆筥を木こにて箱はこを造つくり抽匣ひきだを片ひとけ出だす
 貯たくわへるに此この
 て大小おほ一ひとから
 大おほなるハたもに
 衣裳いさうをハれ小こか
 るハ用もち筆びんとて
 要用ようよう書しよ付つ類るい又またハ
 夾袋かふく煙草えんそう入い等とうの
 手道具てどうぐを藏かくるに用もちる



子 椅

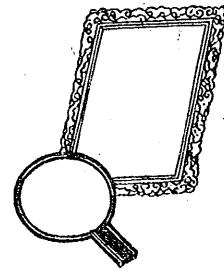
椅子いす林はやし几こ皆みな腰こしを掛かく
 木き鍔つばを以もて造つくれり
 小こ背せのてあり又また左ひだり
 右みぎ小こ欄らんのてあり尻しり
 のあたる處ところを割きた
 る籐とうを以もて編あみ又また
 ハ天鵞絨てんがじよ羅紗らさ等とうを
 以もて張たくわり柔なる小こ尻しり
 小このりり坐ざせり
 以もて快たげから一ひと年ねん

通例つうれい是こ四よ本ほんのり後あとハ



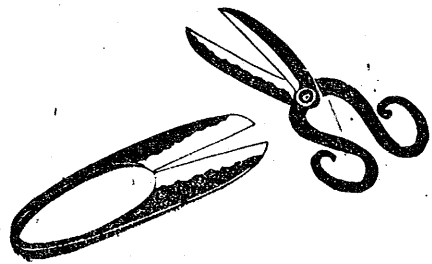
鏡 かみ

鏡は影像を摸寫せしむるものなり鏡
 小銅とぐらを此二種なり鏡乃造り方
 小種々あり通常
 用うる處の鏡を
 銅もガラスも水
 銀もやんや影を
 とるなりガラス
 を裏に水銀を塗
 銅を表面を水銀
 みて磨るるなり



剪 はさ 刀 み

剪刀小三種有皆鉄を鍛て造れるもの
 あり鉸刀を鍛冶工の銅鉄を切る小用
 ありハハ鉸刀あり外科
 醫の膏藥紙等を切り
 或は植木屋ノ草木の
 小枝を切る小用あり
 此を夾剪といふ縫
 裁工の織物をきり又
 通例紙等を切る小用
 ありを鉸といふあり



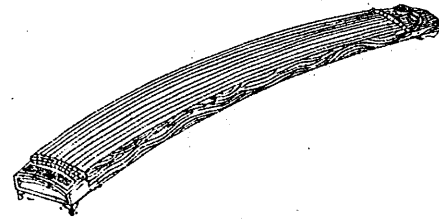
太鼓

太鼓は通例馬皮を以て作り抱を以て
 歩ののり種教甚多し樂小用するあ
 り軍中小用ありあり畫
 ヤの時に報るあり神
 社小用ありあり方今軍
 中小用ありあり
 ツキを以て胴を作する
 あり又し太鼓のり鼓
 の如く緒を以て両面の
 皮を以てなりあり



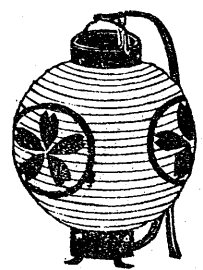
琴

琴も数多く瑟あり箏あり皆琴あり五
 絃十三絃二十五絃等あり其外一絃琴
 とて絃一筋のその有只
 琴とあり云一も通例
 用ぬる十三絃なる物を
 いふ絃の緩急の序をと
 のふる又形の物を以て
 絃を支ふ是を琴柱とい
 ふ弾くふは必し琴丸を用
 う其聲優みして人れ心を悦む



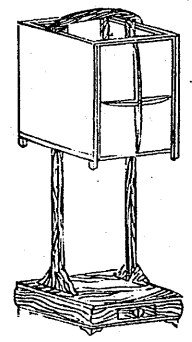
提燈

提燈は亦行燈の如く燈を點てるその
 ようにして夜中歩行の時提げ行ふ便ふら
 多し箱提燈あり高
 張り弓張あり高
 り腰差を多く
 馬の上小用ふ提
 燈の蠟燭を以
 て火を點せり



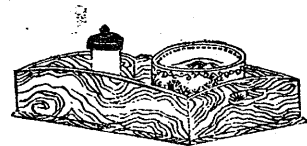
行燈

行燈は燈を點てるに四柱を立て
 紙をはり風を障ふ圓行燈あるそのあ
 り内外小三柱
 を立上下小輪
 を置き内外の方
 を揺ぎ外の方
 を旋りて開閉
 小便利から
 むラムプも亦
 あんどんの一ふり



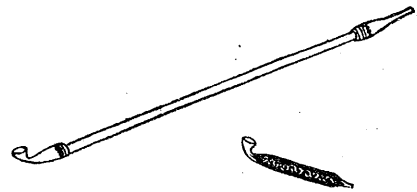
煙草盆

煙草盆を造り其中火を入
 煙草を置いて煙草を吸ふ
 爲の火を入置
 器あり造り方種々
 何り又小なる箱
 火鉢の如きもの
 あり火を入を陶
 此鑄物等あり
 壺も亦鑄物の陶
 物あれとも通例
 竹筒あり



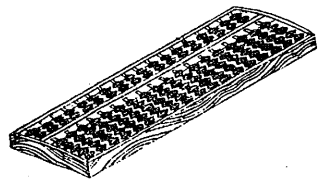
煙管

煙管を煙草を吸ふ器あり上端小
 四角りこれを火皿といふ下
 角り吸ひ口といふ
 両端を銀赤銅真鍮
 等のそのを以て作
 りたる管にて中を
 竹筒たりらうとい
 不通例七八寸の
 長さありまよ三四
 寸此物あり



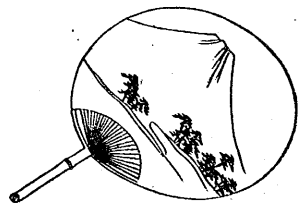
算盤

算盤を浅ま箱を作り小さき玉を細き竹の串を以て通し中程より上を横小境一上ふ一ツ或二ツの玉を置これ五玉とふ一ツをちて五玉と當る故にツ下五ツの玉より一ツ即ち一ツの下の玉よりツ上の玉一ツとの比較あり通計一串十或ハ十の数字あり即ち算用を器なり



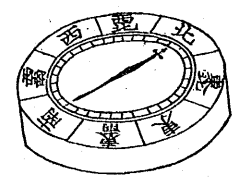
團扇

團扇を摺扇と全一之暑中涼をとるものなり竹を細くさきて骨とふし其末を柄とふし其細き骨の両面を紙を以て張り九き形とふし其紙小花鳥風景人物等畫記たるあり此の外種々の製法あり



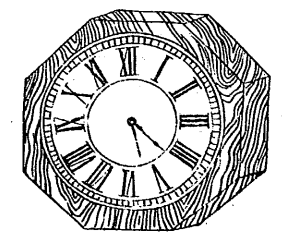
磁石

磁石ハ海容の欠くべからざる器也
 て方位を示すものなり盤面を三十二
 方小分ち中心おたて
 小細き針をたて其上
 に横おひらたさ針を
 置ん此針常小や、正
 南北を指示を故ふハ
 がある大洋中茫茫た
 る所おても此器小よ
 りて方位を知るあり



時計

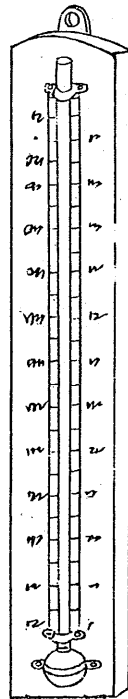
時計ハ時刻をいさる器なり製作方
 種あり袖時計も丸く平扁小一て至
 小なり時計表面小
 世四時をわりつけ
 中不機關ありて表
 面の時を針を以て
 指示の時ハ日の二
 十四分の一分ハ時
 あり時の六十分の一ハ
 分抄ハ分の六十分の一ハ抄



童子川卷之三

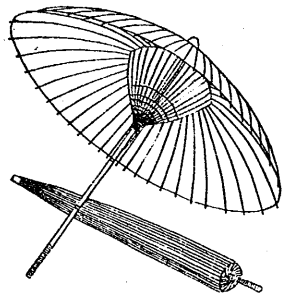
寒暖計

寒暖計を寒熱を驗する器なり度のと
 り方三様あれとも日本等あてをハア
 レン一エドといへる人のその多く用
 うるあり此器ハ三十二度を氷點と一
 二百十
 二度を
 沸騰點
 と此器ハ下端の球の中ハ水銀まよ
 と色なる火酒を盛り其昇降およびて
 度を驗するあり



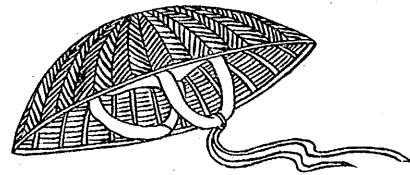
傘

傘ハ雨天の時さして雨を避くるもの
 あり竹を細くさき轆轤といへるもの
 して伸縮小便ふたあ
 つき紙をもつてはり
 上ハ荏の油を塗り水
 の漏ぬやうませし物
 あり白地のを此あり
 地の目とて中白く上
 下紺色のらみを以て
 張りたるあり



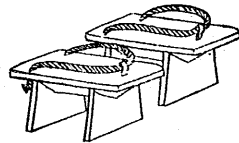
笠うき

笠うきは頭かぶに戴かぶきて日光ひかり又またハ雨あめをふせくものあり平ひらたぐ皿ひらの如ごとく竹たけの皮かわ網あみ代しろ又また塗ぬり笠うきあり又また鉢はちのこととく深ふかく鉢はちして顔かほの見みえぬものあり俗ぞくに鰻うなぎ頭うづかさといふ籐とうままとを網あみ代しろを以もつて作つくれり皆みな暑あつ中なか不用いらずうるものあり



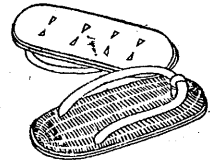
下け駄た

下け駄たは高たかきを足あし駄たといひ、卑ひくきを日ひより和わ下け駄たといひ女め足あし駄たといひ雨天うらふち小道せうだうのわさき時とき用もちる日ひより和わ下け駄たといひ日ひより和わの時とき穿うつきふり通とほ例れい桐きりふて薄うすき板いたの下したふ二枚まいの齒はをう一ひと表おもて小こ緒おとて皮かわ真ま田た天あま鷲じゆ絨じゆ等とうの紐ひもをつけ足あしに穿うて歩あむふあり



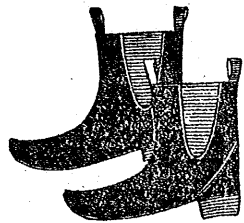
雪駄せつた

雪駄せつたは草履ぞうりの如ごとく小こして裏うらに皮かわを張はり跡あとの履はき鏡かがみの小こなる板いたを片ひとけ表あは竹たけ皮かわを細こくさじ草履ぞうりのこことく編あみ皮かわ其その外ほか色いろ々々の織おり物の緒おを付つく日ひ和わの時とき穿うちて歩あむもの形かたちちちえつうき一ひと様のようも此これあり



靴くつ

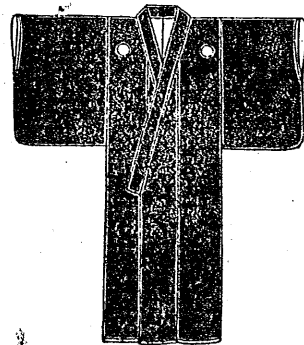
靴くつは皮かわよよて造つくる足あし袋ひの如ごとく小こして足あしの大おほ指ゆびと人ひと差さ指ゆびの間まのささけぬ物ものあり踝くるぶしの上うへよよてゑる履はき小こごむとておおぞを織おり込こむ物ものををつけ伸の縮ちぢむ七しち一ひとひひ踵かかとの下したを皮かわを以もつて高たかくもり歩あむ小こ便べんふららしむ靴くつ小こ長なが靴くつとて膝ひざまで筒つつみのちるちり



第五單語終

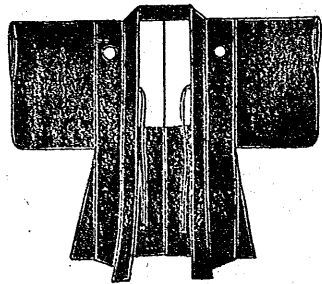
着物

第六單語
 着物を身を蔽ひて暑寒を防ぐそのお
 り絹麻木綿色々のそのろく製せり着
 その、内小ハ衿袖
 袂裾ふと乃名あり
 男子の禮服え近來り
 筒袖小定めのらる禮
 服小大の二様あ
 り婦人の禮服ハ
 裯襦地赤地黒等の別あり



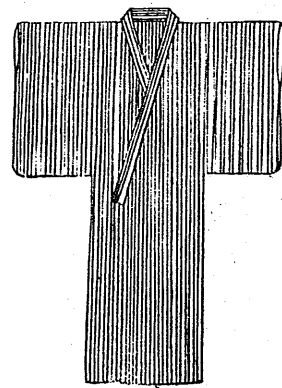
羽織

羽織を常服の上小着たる羊衣ふり鳥
 の翅つば小似たる物よして斯く名つくる
 よ一通俗男
 子の軽き禮
 服よして吉
 凶賀弔等小
 着用せり地
 合方絹麻紹
 等氣候小隨
 ひいろくり



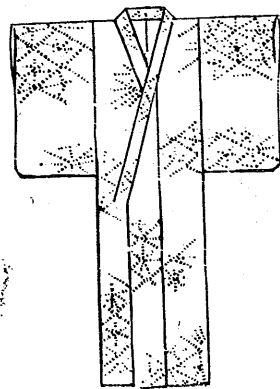
單物

單物ハ裏のふまひと一乃着物ふり夏
 至前後常服小用ゆるえ此ふ一て地合
 絹木綿さゆ有
 此外小綿衣裕衣
 惟子の三種有り
 綿衣ハ季秋より
 季春まで裕衣
 初夏と季秋の始
 唯子仲夏より仲
 秋まで着るもの也



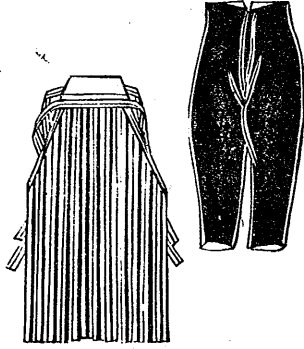
浴衣

浴衣ハゆるいひらの略みてあせ
 一時用ゆる単衣ふり袖ハ廣袖
 て通例白地ふり
 の模様を染一色の
 あり又絞りとて種
 々の模様あり
 一ののり又木綿
 ちゞみふとあても
 製せり又木綿の單
 衣を通りてゆかともいり



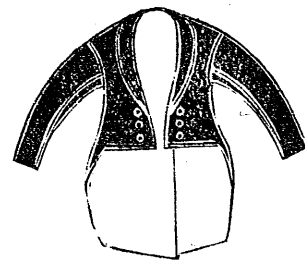
袴

袴ハ腰より以下常衣の上子穿てる服
 して平定男子の用うる服なり馬乗檔
 高平袴等の別有りハ婦女も袴
 を着せし今も
 風俗衰へて官女
 官女の外着たる
 ゐと稀なり官女
 此袴を緋の袴と
 いふ袴を古し
 裳といへるは此、遺製あり



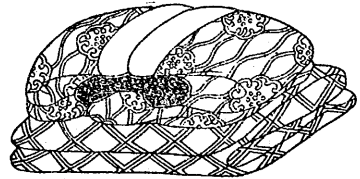
上^あ衣^う

上衣と云ふ筒袖の短き衣服なり前を
 不たんこをせめて合屯る也惣て筒袖
 製の衣服身體より之のふひ動作不便
 ふして人身を勤
 捷ふらむ益
 かり地合羅紗を
 用ぬ夏時を麻も
 ても製せり観衣
 ハシヤツツ子ヨ
 ツキ等の物有り



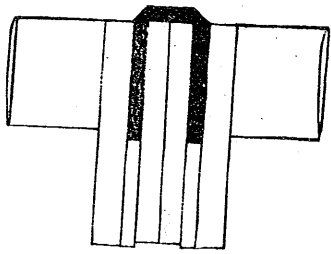
夜具

夜具ハ寝所にて體を蔽ひ寒濕を妨ぐ
 の具ふり下敷を蒲團といふ上
 小被ふと比、厚
 さ成夜具薄きを
 ろいませといふ
 いつれも袖あり
 あはれ綿夜の如
 し地合縮緬絹木
 綿貧富不應對様
 くあり



襦袢

襦袢層貼して着る半衣ふり襦
 袢あはれ多ハ何一た氣を引き身體の
 健康を害を
 頻し洗濯
 て清潔を
 一し地合ハ
 木綿又麻ふ
 り襦袢ハ寒
 暑とも始終
 着るあり



帽

帽を西洋にてシヤツプ或はハツトと云ふ其形匾くして眉廂ひまげのるをシヤツプといふ頭高うまたらくして眉廂ひまげあまたのをハツトと云ふ小禮服の帽子の如く惣もる帽子ハ貴人の逢ふ時之を脱して礼を為しあり日本も古來ハ帽子れ製たりけれとも今いま通例つうれい此シヤツプとハツトを以もつる帽ぼうと名なり



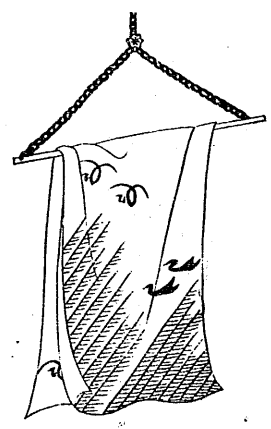
頭巾

頭巾つんを頭あたまを包つつみ寒さむを防かぎぐの具ぐみして其形種々あり地合ちあひも精木綿縮緬等品せいぼめんしゆくもめんとうひん僧徒そうとの頭巾つんハ禮服れいふくにて其裁ざい縫色ぬいしき々々々々或様あるさまあり



拭手ぬぐいの手ての

手拭てぬぐいを身み體てい手て足あしの濕ぬれを拭ぬぐふを比ひふり
 晒ひ木き綿わたふて種しゅ々々染ぞめ色いろ摸も様ようあり白しろ地ぢふ
 あり暑あつ氣きの時とき
 節ふし面おもて体ていふとの
 汗あせを拭ぬぐふわさ
 さ物ものをを拭ぬぐふ
 拭ぬぐといふ麻あしあ
 せ和わり等らみま
 製せいセリ



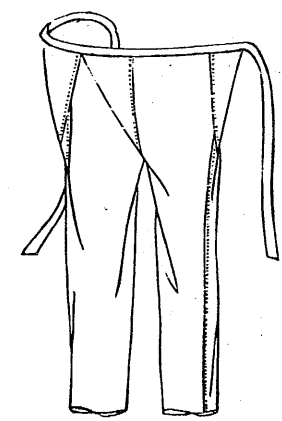
袋手ぶくろの手て

手袋てぶくろ手てを蔽おほひて寒かん氣きを防おほせ或あるハ汚け穢せ
 をさえる為ための具ぐふり柔な軟ななる革かわふ
 て作つくるを比ひふ
 りまねいとふと
 ふて作つくれるも何なに
 り貴き人ひと師し匠じやう等ら乃なり
 前まへふて之これを用もちゆ
 るハ不ふ敬けいふて必かならず
 脱だつそる杖じやう日本にっぽんの
 禮らいとせり



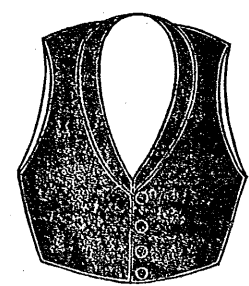
引股

股引は股脛をまとふ品にて筒のごとく縫合し皮膚に接して着るなり木綿にて製せり絹にて作れる
 之乃は又股引といふ又股引を短ふ一膝の下までおして其下小脚袴を著るも有りやぬと



短胴服

短胴服は上衣の下のきつ短くして袖のあき着物之前面を羅紗等にて作り背面を他の粗糸の以て作れり胸のひろく首よ直に鈕をつけたる有り製作の様あり



顔うほ

顔うほを耳みみ目め鼻はな口くちのところ所ところ取とり目めの上うへ小
 眉まゆのところ所ところ取とり目めの上うへ小
 とい、下したを願ねがひ
 状かたちを容貌ようぼうふて
 も察さつをべふれ
 ハ謹ちかんく不ふ潔けつ
 まして猥わり那な
 る容貌ようぼうをふ
 べからば



袋ひ足た

足袋あしひハ足あしを蔽おほふ品しなふり白しろ足袋あしひのり紐ひも
 足袋あしひあり紐ひもふてむきふり靴留くつどめあり
 裏うらハうんさ
 い刺さうら等ら
 の別わかあり革かわ
 足袋あしひとてま
 めし革かわふて
 作つくれふむ
 り防寒ぼうかんふも
 よろ



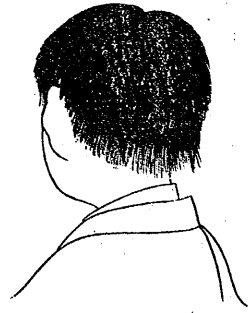
目め

目めは又またまゝのこといふ人ひと身み五ご官くわんの一いつは
 瞳とん子こを黒くろ球きゅうの中なかに小こあ
 黒くろ球きゅう瞳とん子この別べつあり
 瞳とん子こは黒くろ球きゅうの中なかに小こあ
 る穴あなあり萬まん物の光ひかり
 是こゝより入り込こむ目の底そこ
 小こ形かたち映うつるよ
 より人ひと萬まん物を見みる
 ふり臉かほ睫まつげを目めを守まもる
 護まもるに乃なりあり



頭かしら

頭かしらハ頭かしらより上うへの惣そう名なあり頭かしら上うへのまゝ
 き骨ほねを顛てん骨こつといふ内うちに脳のうといふ液えき
 汗あせあり人ひと心こゝろ知し
 覺かく運動うんどうの根ね原げん
 ふして人ひと身み弟あに
 一の太おほ切きある
 震ふるなり也なり
 顛てん骨こつ是こゝを守まもり
 其上そのうへに又また髪かみあり
 りて是こゝを蔽おほふり



耳み

耳ハミ、といふ五官の一にして聴事を司とる耳、内外の別あり外耳を耳郭といふ内耳を耳孔の内ふり其仕掛を兩方小薄皮なり中水のみときり乃り物の響耳ひびきふ入せハそ此水ふる一種々の響を感せしむる故鳥禽とりに音樂等皆聽分るを治るあり



鼻をふ

鼻をふまゝ五官の一あり嗅事を司とる鼻孔のうち能物の香臭を感るあり平常此呼吸飲食とも其香氣乃よ一物を嗅とけて何さむの口内ふ入志めさよあとの功用あり



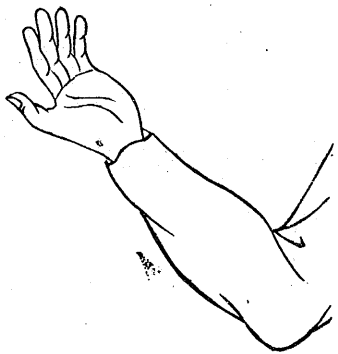
口 くち

口をまよ五官の一よして飲食言語の
 二用を司とれり味ひを辨むるを多く
 舌上を上齧ふ所
 り歯を堅きその
 を齧と柔よして
 消化一易あら
 むるそのあり言
 語ハ咽喉云口よ
 何る薄波と舌齒
 唇の働きあり生けるあり



手 て

手て腕の下乃名ふり物取揚け又ハ握
 るかと此用あり腕の上ハ臂肘と云處
 たり人乃
 技藝手の
 用をる
 事多し常
 子人の前
 ふあらと
 此のふ
 れハ別して清潔ふきべ



指 ゆひ

指を隻手ひとて五本ごほんつゝふり大おほゆひ人ひとさ
 一ひとゆひ中指ちゆうしゆう薬指やくしゆう指等しゆうとうの名なゆひり皆物みなもの以振もち
 一さむとりの用もち
 一ゆひ西洋せいようふてハ
 前まへ文ぶんの四官しきんふ皮かわ
 膚かわを漆うるしへて五官ごくわん
 と以もち層しやうえ物ものふふ
 れて其その粗そ細こ寒かん暑じゆ
 熱あつをを知しるるふり而して
 一て指頭しゆうとう尤なほ是こゝろを試たまみ易い
 一



爪 つめ

爪つめ骨ほねより一ひとて成なり立たちあり手て足の指ゆび
 小こゆりて指頭しゆうとうを守まも護ご一物ものふふれ容よう易い
 小損傷せうそんじやうせ一ひとゆひ故ゆゑ
 一ふらくつ免めんをま
 るもあ一ひとけをと又また
 延のび過りれハ物ものふり
 て傷害じやうがいを招まねくあり
 又また病人びやうにんふと死しる
 前まへハ爪つめの先さきあり
 一心得こころえ一ひとま事ことあり



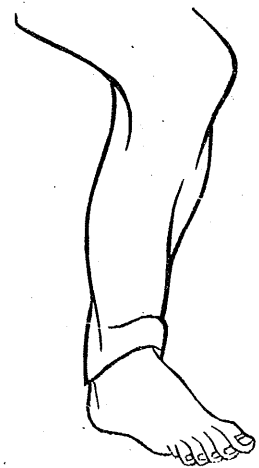
K110-2,86-1

足あし

足

三

足あしは、膝ひざより下したをいふ。蹠たしの上うへを脛すねといふ。其その上うへに膝ひざあり、足あしハ運動うんどう歩行ほこうの用もちあり。人ひと身み運動うんどうせしむるに、背せみハ天然てんぜん乃すなは理りに、背せみ身み氣き活かつ潑しゃくあり。らば運動うんどうハ養生ようじやうの第一だいいちなり。学校がくこうに於おり、少年せうねんなど別べつに、運動うんどうを急いそぐべからば、

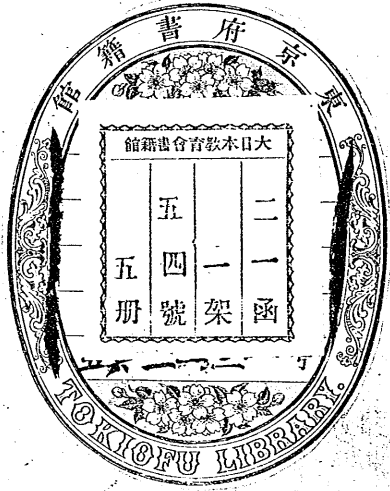


第六單語終

66

176
7
346

共五册



天野
野出
猪岐
之助
譯

師範學校
掛圖童子列

四